

平成 27 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

高い知性、豊かな人間性、健やかな心身を持ち、国際人として、将来、世界のさまざまな分野で活躍できる素質を育てる。

- (1) 高い基礎学力と自学自習力をもてるように、学習中心の学校生活を確立するためのあらゆる努力と支援を惜しまない。
- (2) 学校行事・特別教育活動や部活動等とおして逞しい実行力、実践力を養う。
- (3) キャリアガイダンスを充実させて、早期に明確な進路目標をもたせ、その目標へ向けての学習活動によって進路希望の実現へと導く。
- (4) 国際理解教育と科学教育を専門学科として極めると同時に、両者のメリットを融合させ未来の世界をリードできる人材を育てる。

2 中期的目標

1 確かな学力への取り組み

- (1) 「魅力的な授業」「わかる授業」の実現と自学自習習慣の確立。

※ 目標：授業アンケート項目「生徒意識1」「生徒意識2」の肯定的回答の比率を毎年85%以上を長期的に維持する。

※ 家庭学習時間（週6.9時間）を全国平均レベル（週12.5時間）までに伸長させる。

- ア 教員自らの学びを推進することで授業の質の向上をめざす。
- イ 授業アンケート結果に対して分析を行うことで、問題点を明確にして授業改善に取り組む。
- ウ 生徒の自学自習を支援し、自ら学ぶ力を深めるように助力をする。自習環境を整備し、自学自習の習慣の確立をめざす。

- (2) 国際理解教育の充実

※ 目標：TOEFL iBT スコア 60 点以上を 8 名以上を達成する。（骨太の英語力養成事業の目標ステージ1と同様）

- ア 国際人としての広い視野と感性を育て、グローバルな社会で活躍できる人材の育成を行う。
- イ コミュニケーション能力を向上させ、留学や、海外の大学への進学を推奨する中で、世界を視野に入れた人材づくりを行う。
- ウ S G H 指定校、ユネスコスクールの加盟校として、海外との交流を積極的に行い、体験活動を通して国際性に富む人材を育成する。
- エ TOEFL・TOEIC・英語検定などの資格試験に積極的に挑戦し、自ら語学力の向上を図る生徒を育てる。

- (3) 科学教育の充実

※ 目標：科学系コンテストにおいて、年間に3件以上の入賞

- ア S S H 事業及びその人材育成校の指定校として、その取り組みを深め、世界で活躍できるグローバルな科学人を育成する。
- イ 五感で体得する理科授業をめざして、多くの実験実習を授業に取り入れ、その効果的な活用を行う教材を開発する。
- ウ 高大連携、大学訪問研修等を実施し、高校と大学の科学教育のスムーズな接続を行うとともに、生徒の学習意欲を高める。

2 進路指導の充実

- (1) 生徒一人ひとりの進路について、自ら目標を立て、可能性を追求し挑戦する態度を養い、実現できる生徒を育成する。

※ 目標：毎年安定的に国公立大学進学者 30 名以上、関関同立 180 名以上の合格

- ア 進路講話の実施等、早期からのキャリア教育を計画的に実施し、高い目標を掲げた、望ましい職業観の育成を図る。
- イ 進路情報の的確な提供と、きめ細やかな進路選択の指導を行う。
- ウ 進学補習を計画的に実施し、進路を実現するための学力向上、家庭学習時間の伸長を支援する。

3 開かれた学校作り

- (1) 学校の特色ある教育活動について、幅広く情報発信をすると共に、地域と連携し、「地域の教育拠点」としての機能を果たす。

※ 目標：学校説明会参加生徒数 1500 名以上

- ア 様々な情報メディアを活用し、きめ細やかな情報の発信を行う。
- イ 学校説明会等を充実させることで、入学者に対して、本校の教育活動に対する理解を深める。
- ウ 地域の小中学生や住民に対する科学講座・英語講座を実施し、地域の科学教育、国際教育の中核としての地位の確立をめざす。

4 活気と規律のある学校生活

- (1) 生徒一人一人を大切にするとともに、自主性の向上をめざす。

※ 目標：部活動への入部率 85%以上。遅刻総数 1500 名以下

- ア 個別に支援が必要な生徒への対応について、校内の組織を整備するとともに、きめ細やかな運用を実施する。
- イ 部活動を活性化し、参加者を増加させるとともに、その内容の充実を図る。また、学習と部活動を両立することのできる生徒を育てる。
- ウ 基本的な生活習慣を確立し、規律ある行動をとることのできる、社会性の豊かな生徒を育成する
- エ 生徒会活動を活性化し、学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させ、「生きる力」を育む。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 27 年 12 月実施分]	学校協議会からの意見
<p>【総合的な項目】「泉北高校に進学してよかった」保護者 94% (増減なし)、生徒 91% (3%増) で、総合的な評価において、非常に高い結果を得ている。「学校が楽しい」保護者 90% (増減なし)、生徒 84% (1%増) と微増。</p> <p>【確かな学力への取り組み】家庭学習が不足しているとの共通認識があり、増強の取組が急務である。授業でのコンピュータ等の活用についても、生徒 53% (1%増)、教職員 59% (5%減) と、さらなる推進が必要。</p> <p>【部活動】「部活動の活性化について工夫している」教職員が 94% (5%増) が反映し、部活動への積極的な参加は、生徒 72% (2%増)、保護者 79% (3%増) だが、学習との両立は、生徒 45% (2%増) に対して保護者 53% と課題を感じる。</p> <p>【施設と安全】保護者回答で「学校の施設・設備・学習環境は、ほぼ満足である」59% (8%減) と施設設備に対する要望が高い。「学校は、事故の防止に配慮している」51% (増減なし) と安全性の向上も求められている。</p> <p>【規律ある学校生活】「学校の生徒指導の方針に共感できる」が、生徒 70% (1%減)、保護者 70% (増減なし) と一定の理解を得られている。</p> <p>【その他】「PTA活動が盛んである」の保護者回答が、50% (7%減)、「学校のPTA新聞は、よく読んでいる」が 58% (増減なし) と課題がある。</p>	<p>第1回 7月2日(木) 《入試選抜について》高校入試制度の変更にともない、中学生にとって選択肢が広がった。APを明確にして、中学生が説明会に参加しやすい体制を作してほしい。</p> <p>《授業アンケートについて》アンケートを活用して授業改善によく取り組んでいる。SSH、SGHと取組を通して、生徒の意欲向上を進めてほしい。</p> <p>第2回 10月29日(木) 《特色ある学校作りについて》課題研究など専門学科の特色は打ち出せていると思う。政治・選挙やSNSについての学習など、時代にあった教育を進めてほしい。</p> <p>第3回 1月27日(水) 《アンケートの分析について》学校教育自己診断等のアンケート項目を精選して、分析・対策までのルーチンを構築してほしい。</p> <p>《生徒の学習について》スマホ時代には生徒の自律を促す仕掛けが必要になる。生活習慣を育てるとともに、勉強についていけない生徒への対応を学校側が率先しておこなう必要がある。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 確かな学力への取組み	ア 自学自習の習慣確立。 イ 授業改善。	ア・自習室の環境向上に努め、利用の推進を図る。 ・家庭学習時間の増加をめざす。具体的方策を、各教科が提示し、課題検討委員会が集約する。 ・勉強合宿の実施や卒業生チューターの利用による自習習慣の定着化を進める。 イ・各学期に研究授業週間を設定し、教科ごとに1回以上の研究授業を行い、合評会を開催する。 ・公開授業・授業参観の参観人数の増加を図る。 ・授業評価アンケート結果をもとに、授業力アップのための具体的対策を検討し実施する。	ア・「1時間以上」家庭学習する生徒の割合が50%以上。 ・自習室平均利用者10人以上。(3年計画の初年度) イ・生徒による授業アンケート「生徒意識2 88%」(85.0%)、「生徒意識1 88%」(86.7%)以上の達成。 ・研究授業を学期ごとに全教科1回以上、全教員1回以上参加。 ・公開授業・授業参観の人数合計270名以上。(200名) (△)内は26年度	ア・「1時間以上」家庭学習する生徒の割合が36% (△) ・自習室平均利用者約10人 (○) イ・生徒による授業アンケート「生徒意識2」82% (△)、「生徒意識1」80% (△) ・初任者を中心に、アクティブラーニングや白熱教室を模した研究授業を学期ごとに実施、教員のべ90人が参加。(○) ・公開授業・授業参観の人合計282名 (○)
(2) 国際理解教育の充実	ア グローバル人材の育成を行う。 ・SGH事業の推進。 ・英語力の底上げ。 ・国際文化の把握と興味の維持。	ア・SGH事業の推進。 ・SET・NETを効果的に活用し、英語によるプレゼンテーション能力・会話力を向上させる。 ・1・2年生全員にGTEC for STUDENTSの年1回の受験で生徒の英語力の分析を行い、科学的なアプローチで能力向上を図る。 ・TOEFL iBTの受験機会の推奨。 ・総合科学科において、「科学英語基礎」を開講し、課題研究等の発表を英語で行う力を養う。 ・総合科学科のグローバルコース選択生は、研究成果を英語で発表できるようめざす。 ・海外進学や留学の説明会を行い、留学や、海外の大学への進学推奨を一層進める。 ・海外修学旅行を実施する。また、海外の高校との国際交流を受け入れ、短期海外研修を実施する。 ・ユネスコスクール全国大会等に年1回以上参加し、交流を深める。 ・学校設定科目「GET」、「ACT」によるTOEFLのスコアの向上を図る。	ア・TOEFL iBTスコア40点以上8名以上を達成する。 ・2年時GTEC平均点480点以上。 ・スピーチ・レシテーションコンテストの各年1回実施。 ・総合科学科課題研究発表において、英語でプレゼンテーションをする班を3つ、英語でポスター発表をする班3つ。 ・総合科学科課題研究の発表概要を全員が英語で行う。 ・海外校の受け入れ5件以上。海外研修参加者50名以上。 ・ユネスコスクール全国大会等に年1回以上参加し、交流を深める。	ア・TOEFL iBTスコア40点以上56名。(○) ・2年時GTEC平均点445点。(○) ・スピーチおよびレシテーションコンテストを2学期に実施(○) ・総合科学科課題研究発表において、英語でプレゼンテーションをする班を1つ、英語でポスター発表をする班はなかった。(△) ・総合科学科課題研究の発表概要を全員が英語で行った。(○) ・海外校の受け入れ2件(相手校の事情でのキャンセル1件を除く)。海外研修参加者50名。(○) ・ユネスコスクール全国大会に参加(○)
(3) 科学教育の充実	ア SSH事業の指定校として、人材の育成を行う。	ア・課題研究を深めて、科学系コンテストの応募や学会での発表件数を増加させるとともに、コンテストでの入賞をめざす。 ・理数理科での実験実習の実施率を維持するとともに、より効果的な新しい実験・実習に取り組む。 ・高大連携講座や大学訪問研修を発展的に継続し、講座の参加人数、訪問する研究室数も昨年並みか、それ以上とする。 ・課題研究の成果と進学実績への結びつきを意識して、国公立大学のAO入試や公募推薦での合格をめざす。 ・海外高校生との合同研究や発表を行う。	ア・ <u>国公立大学のAO・公募推薦の合格者3名以上。</u> ・コンテストや学会発表を5テーマ以上(3テーマ)、2件以上の入賞。(1件) ・実験の実施率は30~50%、新実験を各科目2テーマ。 ・高大連携講座の参加者を延べ160人以上、大学訪問研修を30研究室以上。 ・海外との合同研究発表年1回以上。	ア・国公立大学のAO・公募推薦の合格者2名。(△) ・コンテストや学会発表を5テーマ、入賞3件。(◎) ・実験の実施率30~60%(◎)、新実験を各科目2テーマ(○)。 ・高大連携講座の参加者を延べ153人、大学訪問研修を26研究室。(△) ・台湾の高校との合同研究発表を1回実施。(○)
2 進路指導の充実	ア 望ましい職業観の育成と進路実績の改善。	ア・高い目標を持ち、進路実現に向けて挑戦する態度を養う。 ・進路HRで進路選択に関わる情報提供(学部別ガイダンス、予備校の講師による進学講話等)を行う。 ・オープンキャンパスへの積極的な参加の奨励。 ・校内実施の外部模試受験による、学力状況の共有と学習目標設定への活用。 <u>(データ分析に基づいた科学的なアプローチによる学力向上を図る)</u> ・長期休業中の希望講習の充実。 ・予備校と提携した校内予備校の開催。	ア・センター試験出願者180名(173名)、国公立大学合格者30名(24)、関関同立180名。 ・進路講話(各学年3回以上)保護者向け講演会(各学年1回以上)の実施。 ・オープンキャンパスへの参加者数延べ300名。 ・外部模試(1年1回以上、2年2回、3年5回)の実施し、現状分析を把握できる体制を整える。 ・外部と連携した講習を年1回以上実施。	ア・センター試験出願者125名(△)、国公立大学合格者20名、関関同立120名。 ・進路講話を各学年2回実施(△)。保護者向け講演会を各学年1~2回実施(○) ・オープンキャンパスへの参加者数延べ400名。(◎) ・外部模試(1年1回、2年2回、3年4回)を実施。(△) ・FINE SYSTEMを用いた学習状況を把握する体制を構築した。(○) ・TOEFL関連で外部と連携した講習を継続的に実施(◎)
3 開かれた学校作り	ア 様々な情報メディアを活用し、情報の発信を行う。 イ 学校説明会等を充実させる。 ウ 地域の小中学生や住民に対しての科学講座・英語講座を実施する。	ア・HPの更新や、Facebookの発信による情報提供を積極的に実施し、速報性を高める。 ・月刊学校新聞およびメールマガジンを発行し、保護者への学校行事活動の周知を行う。 イ・学校説明会を充実させる。体験授業やクラブ体験、ミニオープンスクールなど、さまざまな方法で学校を紹介し、体験してもらう機会を提供する。 ・中学校および進学塾を訪問し、きめ細やかな広報活動を実施する。 ウ・小中学生対象の科学教室・英語教室を定期的・継続的に実施する。また、夏期休暇中に自由研究の指導なども行う。 ・地域住民対象に、自然観察講座や実験講座を開催する。	ア・HPを毎週、Facebookを隔週で更新。 ・新聞を毎月発行、メールマガジンを800名、100回配信。 イ・学校説明会を5回実施。参加人数1500人(1400人)。外部会場個別応接説明会10回。 ・中学訪問2回、80校実施。進学塾訪問50校。 ウ・小学生対象の科学教室は5回連続の基礎講座に加えて、2分野で発展講座を開催。 ・地域住民向けの講座を3回以上開催。	ア・HPを毎週、Facebookを隔週で更新。(○) ・新聞(「月泉」)を毎月発行、メールマガジンを992名、1月末までに86回配信(◎) イ・学校説明会を5回実施。(○)参加人数1350人(△)。外部会場個別応接説明会13回。(◎) ・中学側の希望もあり中学訪問を取りやめた。進学塾訪問も取りやめた。(△) ウ・小学生対象の科学教室は5回連続の基礎講座に加えて、4分野で発展講座を開催。(◎) ・地域住民向けの講座を5回開催。(◎)
4 活気と規律のある学校生活	ア 校内の支援組織のきめ細やかな運用を実施。 ・部活動の参加者を増加と学習と部活動の両立を促進。 ・基本的な生活習慣を確立し、社会性の豊かな生徒を育成する。 ・学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させる。	ア・高校生活支援カードを活用し、個別の支援を必要とする生徒への包括的な支援体制の充実。 ・相談室機能を充実させ、課題や悩みを抱える生徒を早期に発見、支援できる体制づくりを行う。 ・教員の人権意識やカウンセリング能力を向上。 ・体験入部の期間の設定や、中学生対象の体験入部など、部活動の活性化に向けた取り組みを実施。 ・部活動参加者の進路実現に向けて、学習意欲向上に向けた分析と対策を実施する。 ・遅刻の実態と原因分析を行い、遅刻を減少させ、生活規律を向上させる。 ・学校行事等に対しての生徒の自主的な運営を支援し、充実した学校生活を支援する。	ア・支援会議の隔週開催を中心に情報共有を推進。 ・SCなどによる教員対象の研修会の実施。 ・入部率85%以上(83%)。クラブ体験会参加者170名以上。 ・遅刻者数年間2000人以下。(2308人) ・学校教育自己診断における「部活動と学習の両立」の肯定率を45%以上。 ・「生徒の生徒会行事参加」の肯定的回答70%以上。	ア・支援会議の隔週開催を中心に情報共有を推進。 ・SCなどによる教員対象の研修会の実施。 ・入部率84%(△)、クラブ体験会参加者190名。(◎) ・遅刻者数2654人(△) ・学校教育自己診断における「部活動と学習の両立」の肯定率45%(○)。 ・「生徒の生徒会行事参加」の肯定的回答78%(◎)